

9 貧民街の希望の学校

軽度の知的障害のある子らが学ぶコペンハーゲンの国民学校・エンゲスコーレンを2014年秋に再訪した。学校には歴史がある。



1848年、ヨーロッパは革命の只中にあつた。フランスやドイツで絶対王政は倒れた。マルクスは『共産党宣言』を発表。イタリア統一、ハンガリー、チェコ、ポーランドが揺れる。

デンマークでは、当時の人口で10人に1人が参加した1万5千人のデモ行進があつた。国王は市民の要求を受諾し、絶対王政に幕をひいた。翌年には憲法が成立する。以後、グレントヴィイらのフォルケ・ホイスコレ（国民高等学校）運動による農民の連帯と労働運動の発展によって、民主主義と福祉国家への道をあゆみはじめる。

エンゲスコーレンの玄関には、「1895」とある。革命から50年。市の人口は15万人か



ら現在に近い50万人に激増している。大半は貧しい工場労働者だ。この学校は、120年前、「スラム街の貧しい家庭の子どもたちに教育を！」と一人の女性が開設したそうだった。学校に行けば、食堂があり、勉強も教えてくれる。そして時が過ぎ、軽い知的障害児の学ぶ公立の学校になった。

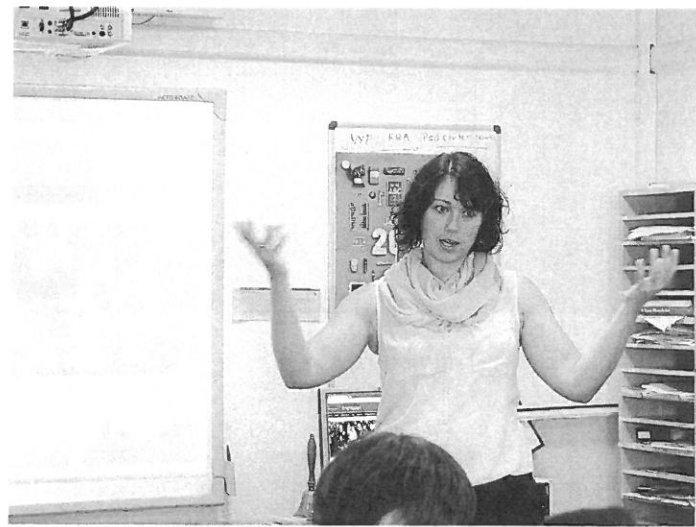
糸賀一雄らが創設した近江学園も、戦災孤児といわれた子どもたちを貧困から救い、「腹をくちく」することがねがいの一つだった。そのなかには、当たり前のこととして知的障害のある子どもたちがいた。

コペンハーゲン中央駅裏の貧民街につくられたこの学校も、敗戦後の滋賀の近江学園も、その根底にある思想は、地下室でつながっているようだ。すべての子どもには教育を受け、権利があり、それを社会は実現する責任がある。



デンマークの国民学校は、ゼロ年生から9年生までの10年間の義務教育だ。インクルーシブ教育が実施され、特別学校の割合は減り、特別学級も縮小の方向だが、それについては賛否両論がある。特別学級には3、4倍の費用がかかる。経費削減のための施策ではないかとの批判もあるそうだ。

マリア校長が全体を説明してくれた。授業をみせてもらった後、おいしい給食を食べながら、さまざまな質問にこたえてくれた。



上=学校の入口
下=マリア校長

デンマークは、1814年、世界で最初に国が行うべき教育の義務を制度化した。日本の義務教育は、1872年（明治5年）の学制によってはじまった。